名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第4回 マヒナのフォローで生まれた歌手・吉永小百合

昭和37年9月20日に『いつでも夢を』が発売されてから55年、すでに半世紀以上が経ちました。

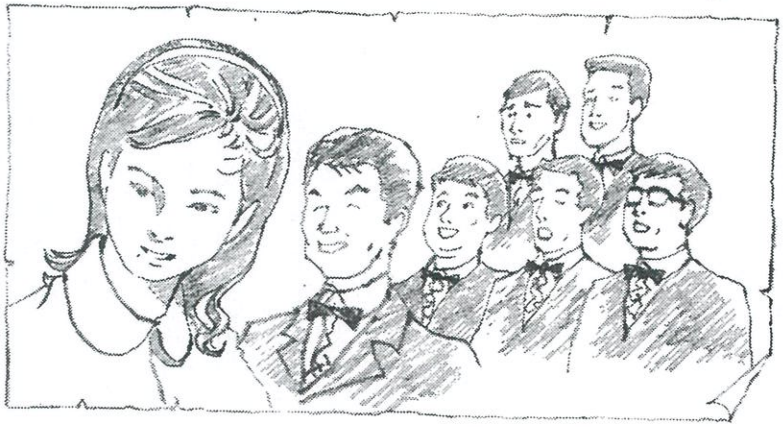
この曲の大ヒット以降、青春歌謡スターによるデュエット・ソングが私たちを楽しませてくれましたが、やはり、その中心にいたのは吉永小百合で、彼女のデュエット曲をおさらいしていくと、所属していたビクターレコードの流れも分かろうというものです。

ご存じのように小百合ちゃんは、橋幸夫とのコンビの前に、昭和37年4月、『寒い朝』でレコード・デビューしていますが、録音時はまだ16歳の高校生。

歌の実力が未知数とされた小百合ちゃんをフォローするためだったのでしょうか、保護者役のようなマヒナスターズとの共演で歌っています。20万枚売れたそうですし、小百合ちゃんもこの歌で紅白に初めて出場できたのですから、マヒナ作戦は大成功といっていいでしょう。

デビュー曲を大ヒットに仕立ててくれた、ということでは『グッド・ナイト』の松尾和子も、『北上夜曲』の多摩幸子も、マヒナには足を向けて眠れないでしょうし、小百合ちゃんのレコード・デビューにあたり、レコード会社にしてもマヒナ頼りの気持ちがあったのかもしれません。

マヒナのコーラスは、ハワイアンでは暑い昼下がり、ムードコーラスでは夜の出勤がイメージされますが、『寒い朝』の場合、リードボーカルの三原さと志さんが丁寧に歌えば歌うほど、小百合ちゃんの通学に同行するお父さんのように思えてしまいます（失礼）。



昭和42年に録音された小百合ちゃんの実況盤（ライブ）では女性コーラスをバックに歌っていますが、夜のムードが払拭され、若々しさがシングル盤以上に伝わって来ます。青春歌謡としてのイメージも広がり、サユリストたちは当時高校生だった小百合ちゃんがマフラーを首に巻いて通学する姿を想像しながら、彼女と一緒に口ずさんでいたことでしょう。

『いつでも夢を』は、『寒い朝』発売の5か月後、昭和37年9月に発売されますが、シングル盤（B）と前述の実況盤（B♭）とはキーが異なっています。

あらためてシングル盤のほうの小百合ちゃんの声を聴いてみると、裏声で歌う高音部に肉声との違和感を覚え、ほんの少し本間千代子を彷彿させます。

橋幸夫の音域を元に作曲された際、高音部は小百合ちゃんの裏声でも厳しく、半音下げたキーで単独録音し、収録後に小百合ちゃんの声だけ音程を半音高く上げて橋の声とドッキングさせたのではないか。そんなことを想像しながら、半世紀前の名デュエット・ソングを楽しんでいます。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。著書に『私的「昭和大衆歌謡考」』第1～3集（グスコー出版）がある

2017 9/4 (月) 発売号